

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19251008

研究課題名（和文）アンコール遺跡における出土貿易陶磁器の様相解明

研究課題名（英文）the Elucidation of the Meaning of Trade Ceramic Ware Unearthed from the Angkor Monuments

研究代表者

山本 信夫（YAMAMOTO NOBUO）

早稲田大学・理工学術院・准教授

研究者番号：30449342

研究成果の概要（和文）：主にバイヨン寺院の南経蔵基壇、南経蔵周辺、外回廊南東面、中央塔において綿密な発掘調査を行い、出土貿易陶磁器の整理を行った。主な成果としては、南経蔵基壇より検出したラテライト造内部構築物は、古期のものとして捉える根拠は乏しく、現存する南経蔵と一体の内部構築物と考えるのが妥当であるとした。また、南経蔵が建立後に用途や儀礼の変更を伴いながらバイヨン期の後期や、ポスト・アンコール期においても利用されていた可能性が推測された。

研究成果の概要（英文）：Archaeological excavation survey was implemented on foundation and surrounding area of the Southern Library, outside of the southeastern section of the Outer Gallery and the Central Tower of Bayon Temple and ceramic wares unearthed from there are organized. As main productions, first, it is appropriate to understand that the inner laterite structures that had been detected from foundation of the Southern Library of Bayon are not ancient structure but related with existing internal structures. Second, it is assumed likely that the Southern Library was used after its construction even during the change in its religious orientation and after the Bayon period and during the Post-Angkor period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	10,600,000	3,180,000	13,780,000
2008年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2009年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2010年度	8,600,000	2,580,000	11,180,000
総計	33,200,000	9,960,000	43,160,000

研究分野：考古学、貿易陶磁

科研費の分科・細目：人文社会系、人文学、史学、考古学

キーワード：クメール陶磁、中国陶磁、アンコール・トム、バイヨン寺院、考古データベース

1. 研究開始当初の背景

この地域を研究対象としたのは、19世紀末のフランス人による調査開始以来、建築の復原・修復や生産遺跡の調査において考古学的な発掘が行われており、東南アジアの中では建築史・考古学に関する研究が比較的継続されてきたという学史的意義を持つことが挙

げられる。1990年代には海外の学術調査も加速化し、フランス極東学院（以下 EFEO）はその研究を先導してきたし、日本では奈良文化財研究所と上智大学の共同調査（クメール陶磁窯、1995年）、上智大学アンコール遺跡国際調査団による調査（バンテアイ・クデイ寺院）、日本国政府アンコール遺跡救済チ

ーム（以下 JSA）の遺跡修復に伴う調査（プラサート・スープラ、バイヨン寺院、アンコール・ワット寺院、1994-2004 年）などにおいて発掘調査が行われている。しかし EFEO（フランス）や JSA（日本）では、考古学の発掘は建築保存・解体・修復の過程で随時生じたものであり、遺物の表面的な報告に止まるため、年代論をはじめとした考古学的分析についても十分な評価が得られておらず、未だに各国調査団間の調査に統一的研究成果がないことが問題となっている。

その要因の一つには、アンコール時代当時の土木事業や建築の改変により、出土遺物の主体をなす中国・東南アジア陶磁・土器は破片が多く、指標となる中国陶磁の鑑定も困難な状況にあることが挙げられる。

日本における中国陶磁分析は研究や分類が進み、細部の鑑定についても一定の成果をあげているが、それでも遺構から遊離した資料は整理・報告時には除外される場合が多い。しかし遺跡の保存環境に応じて遺物の層位帰属関係には良・不良があり、こういった遊離資料を機械的に除外するような例では、遺跡のある時代における相対的情報が正しく反映されていないということになる。この点はアンコール遺跡群についても同じような状況がみられ、明らかに年代を構築できる重要資料であるという事実資料データの蓄積を行わない限り、考古学による年代・編年解明にはすでに限界が生じていると考える。そのため、ここに研究作業の第一歩となる陶磁器選別・鑑定について一段細かい方式を採用すべきであると判断するに至った。

2. 研究の目的

本研究はカンボジア・アンコール遺跡群の発掘調査を基盤として、一つ目には東南アジア諸国に通用する精度の高い考古学基準資料を構築すること。そして今一つは、これに基づきアンコール遺跡群の前身や創建から、展開、廃絶に至る過程における建築・遺構についての年代考証を確実なものとし、さらに各時代における都市空間の再現への見通しを得ることを目的としている。以下の4点を具体的な目的として掲げる。

(1) 既往発掘調査の遺物整理・分析

- ① JSA（日本）が行った発掘調査記録（遺構図、写真他）の検討と中国陶磁の層位的出土状況の追究・確認：対象とする遺跡はアンコール王宮の東に位置するプラサート・スープラとバイヨン寺院である。
- ② EFEO（フランス）が行ったバイヨン寺院の発掘調査遺物の検討：1930年代、1960年代に発掘調査を行っており、その成果から建築関連を主とした報告が刊行されているが、その調査時に出土した陶磁器などに関しては一部報告が見られるものの詳

細不明である。報告書の翻訳を行い可能な限りの帰属遺物の出土状況確認を行う。

- ③ ①および②における中国陶磁の分析・編年の構築化：発掘によって検出されている遺構と遺物の帰属関係を再度整理する。a. 遺物の中で、中国陶磁のうち一部の産地のものに関しては、現状で最も編年研究が安定しているため、重点的に分類鑑定を行う。b. 次に得られた年代判定結果をカンボジア産クメール陶磁、ベトナム陶磁、タイ陶磁の分析に際しての基準として応用・試行してゆく。

(2) 新規発掘調査の実施

- ① アンコール王宮跡の分布調査および発掘調査：国家の頂点に位置する王関連の帰属遺物の解明を行う。遺跡の性格や造営主体が明確であるため、歴史的に研究され、紀年銘年代遺構としての重要度も高く、当時の最上位階層の需要に関わる遺物の関係を分析することができる。これにより、他の遺跡における造営者の階層秩序を考証する指標となりうる。
- ② バイヨン寺院の発掘調査：JSA（日本）と EFEO（フランス）が実施した発掘によって、バイヨン寺院の造成過程と現存基壇下位の新旧構造物に関する資料が得られたが、各段階の建造の計画性や急激な変更の意味、完成・存続年代など、細部にわたり未だ解明すべき問題も多い。

(3) 周辺諸国との比較研究

ベトナム・ハノイ近郊タンロン城からの出土陶磁器との編年比較を行う。タンロン城では、10-18世紀に到る王宮跡が層位的に確認されたとされ、各年代に位置する中国陶磁、ベトナム産陶磁、古く西アジア産陶器も多く出土しているという。アンコール王宮における初期から廃絶期に及ぶ陶磁器編年の、東南アジアにおける汎用性の確認を進める上で非常に有用であり、ベトナム・カンボジアの頂点に位置する階層の文物的需要を比較する上で重要となるため、関連機関と協議の上、遺物の調査を行う準備を進めていく。

(4) カンボジア考古学者との研究協力および実務支援

研究活動を円滑に行うにはカンボジア側研究者との協調が不可欠であり、この点に配慮したい。研究の深化のためには基礎作業の部分に多くの時間を要するが、限られた時間で効率化を進めるために研究作業方法や資料化にあたって一定のマニュアルによる相互の情報共有化を行う。特に発掘調査における現地作業員への指示や出土品整理への技術的指導に関しては、現地研究者の知識、意欲に負うことが大きく、十分な知識・技術支援を用意したい。

3. 研究の方法

本研究は4年間（平成19-22年度）の計画で実施される。現地でのフィールド調査（現地オフィス内での遺物の整理・分析作業、発掘作業など）を主な研究活動とし、国内作業（資料の整理・収集など）によってこれを補うものとする。研究の大まかな流れは下図に示す。

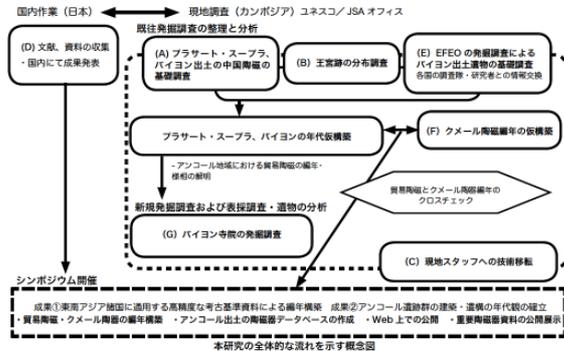


Fig. 1 研究の全体的な流れを示す概念図

具体的には以下の7項目を順次進めていった。

- (1) プラサート・スープラ、バイヨン寺院出土陶磁の基礎調査①（目的（1）-①に相当）
 - ① 既往調査記録（遺構図・土層図・写真）の整理、プラサート・スープラおよびバイヨン寺院周辺全体図作成
 - ・ 遺跡情報の整理
 - ・ 既往発掘地点の配置図作成および製図（トレース）
 - ・ 既往発掘地点の現地確認と遺跡環境の把握および既存の報告書との照合
 - ② 出土陶磁の整理
 - ・ 過去の調査回数ごとの出土状況の点検、把握
 - ・ 出土層位、遺構層単位ごとに遺物の集約を行った後、陶磁種別ごとに選別
 - ・ 遺物データ記入（種類・器種・分類・点数・総点数）
 - ・ 1、2の集約評価、遺構解釈に有用と推定される資料を2から選択、1/1実測図作成
 - ・ 資料の写真撮影および遺物復原
- (2) アンコール王宮跡の分布調査（目的（1）②に相当）
 - ・ 現状写真撮影
 - ・ 表面調査による遺物採集・整理
 - ・ 分布地点の地図化
 - ・ 将来的な発掘予定位置の検討
- (3) 調査基準のマニュアル化、整備および英文化（カンボジア人スタッフ技術支援への基礎作業）（目的（4）に相当）
 - ・ 発掘調査基準（図化方法・遺構記録表・ラベル記入要項など）マニュアルの作成
 - ・ 遺物整理基準（資料分類の手引き・実測要項など）マニュアルの作成

- ・ 基準陶磁実測図の収集
- (4) 関連陶磁資料の収集（目的（1）②、③に相当）
 - ・ 日本国内、カンボジア、ベトナム、中国などにおける比較基準資料（遺跡出土品）の収集・データ化
- (5) 上記のプラサート・スープラおよびバイヨン寺院出土の陶磁と遺構関係の分析、年代の仮構築（目的（1）③aに相当）
 - ・ (1)の作業による成果を総括して中国陶磁の編年から、アンコール遺跡の編年の構築を試みる。
- (6) クメール在地陶磁編年の仮構築（目的（1）③bに相当）
 - ・ (5)を基にして、クメール陶磁、ベトナム陶磁、タイ陶磁などのその他貿易陶磁の編年に応用する。
- (7) バイヨン寺院の発掘調査（目的（2）②に相当）
 - ・ バイヨンの建造過程と年代に関して、一段深化した成果を得ることを目的とする。

4. 研究成果

当初の目的に即し、4点について報告する。

(1) 既往発掘調査の遺物整理・分析
バイヨン寺院における本研究も含めた既往発掘調査は以下の表の通りにまとめられる。

調査回数	発掘調査期間 年・月	BYJA 調査地区	調査地 名称・記号	調査時 備考	備考	JSA 発掘調査	JSA/JASA 発掘調査
1	1995.7~1995.9	北経蔵	南側ベンブ面	7次(3回)・1回(1)A	EFEO調査地点再発掘	7	1996
2	1996.3~1996.4	北経蔵	基壇中央床	BY(NL)P6-1		9	1996
3	1996.5~1996.7	北経蔵	基壇上部・南東隅	BY(NL)P6-2		10	1997
4-1	1997.3~1997.4	北経蔵	基壇北西隅(1回目)	BY(NL)P7-1	4-1次BY97-11回一地点	12	1997
4-2	1997.12	北経蔵	基壇北西隅(2回目)	BY(NL)P7-2(1回目)		14	1998
4-2	1998.1~1998.2	北経蔵	基壇北西隅	BY(NL)P7-2(2回目)	4-1次BY97-11回一地点	15	1998
5	1998.4~1998.12	北経蔵	基壇南西隅・北東隅・南東隅	BY(NL)P7-2			
6	1999.11~2000.3	北経蔵	基壇北西隅下層・下層ベンブ			16	1999
7	1999.11~2000.3	外回廊・内回廊	外回廊・内回廊	BY99	パドネオカ調査	22	2000
7(1)	2007.4~2007.9	南経蔵・南回廊	基壇中央床・南西隅・通廊C・上下層ベンブ			JASA	2007
7(2)	2008.3	南経蔵	基壇中央床(南足)				2008
8(1)	2008.3~2008.6	南経蔵	基壇北西隅・西側内廊構築				2008
8(2)	2008.7~2008.9	南経蔵	基壇中央床下層(南足)				2008
8(3)	2008.8~2008.12	南経蔵	基壇北東・南東隅				2009
	2009.1	南経蔵	基壇南西隅南足				2009
9(1)	2008.7~2008.8	中央塔	中央塔南・北西部分				2008
9(2)	2009.3	中央塔	中央塔南・北東部分				2009
10	2009.2~2009.3	中央塔	西小室・西室				2009
11	2009.8~2010.10	南経蔵	上部床・内部構築				2009
12	2010.2~2010.9	外回廊南東部					2009

① 今回の調査基準整備にあたり、JSA/JASAが行ったバイヨン寺院発掘調査については調査回数と調査地を併記した。

② (1)~(4)は解体工程に合わせて断続的に実施した考古調査である。

③ 考古学発掘調査はJSA/JASAで発掘行われてはいないが、JSA/JASAの調査回数とは分けて独自の回数とした。

Tab. 1 バイヨン寺院発掘調査表

これらより明らかとなった問題点としては、北経蔵の調査における周辺テラスの造成過程と基壇下位の新旧関係や、下層ラテライト・ペープとの年代差の把握については不明確なままとなっていることが挙げられる。南経蔵ではこの点を明らかにする事が第一であるとした。また、バイヨン全体の建築過程案について記されたジャック・デュマルセの4段階説やクロード・ジャック3期説のなかには細部における異同もあり、その一つとして外回廊と内回廊の間に増設された16の祠堂とされる遺構についての問題点もある。これらの祠堂は南北経蔵建設以前に撤去され、また北北部では祠堂Mが外回廊構築以前に

建設された事は EFEO の発掘や JSA の建築調査で判明している。南経蔵に隣接して二つの祠堂 (B・C) の基礎部分があり、発掘調査において重複関係について再確認しておく必要があること、さらにその性格・機能の解明も望まれることが整理された。

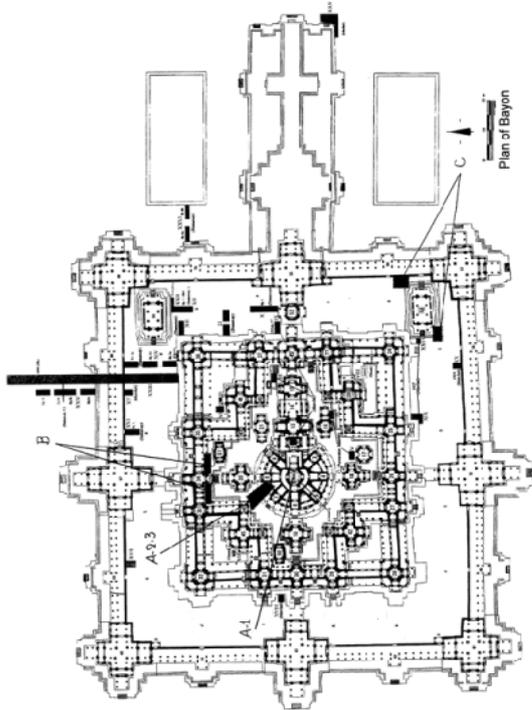


Fig. 2 バイヨン寺院平面図

(2) 新規発掘調査の実施

バイヨン寺院において以下の4箇所の発掘調査を実施した。

- ① 南経蔵基壇
- ② 南経蔵周辺 (通廊 C の東側半分と、さらに下層に位置する上層ペーヴ、下層ペーヴなどの遺構)
- ③ 外回廊南東面
- ④ 中央塔

全ての発掘調査にて出土した貿易陶磁器の整理を行った。併せて過去の未整理遺物を行い以下の研究の基礎とした。

各々の結果は以下の通りである。

① 南経蔵基壇

検出したラテライト造内部構築物は南経蔵の古期建物の一部とする可能性も考慮されたが、層位や版築工程の状況から、この構築物を古期のものとして捉える根拠は乏しく、現存する南経蔵と一体の内部構築物として把握しておくのが妥当と考えられる。ただしその機能ついて、これが内部構造の強化に有効かを考えるとき理解に苦しむ点もある。

a. 東西ラテライト造内部構築物の上面レベルが一致しない事。また西側ラテライト造構築物の上面は段違い不揃いで石材を一部撤去したような状況も見られる。

b. この構築物は基壇上部床面石材と接しておらず間に版築層を挟む。同様に下方も基壇下部の厚い版築層上に積み上げられており、ほぼ基壇中部の中に浮いた状態で埋め込まれている。

c. 東西ラテライト造構築物上部はやや乱雑な積土で、周囲の丁寧な基壇内版築層と異なる。

平面上では、東西ラテライト造内部構築物は経蔵基壇内部の補強施設として解釈可能であるが、上記 a、b に示すように実際の補強効果には疑問点も生じる。あるいは経蔵は宗教施設としての性格上、この構築物は一つの儀式的な性質も兼ねていた事も考慮される。また上記 c の点では基壇上部床面が一部改変、あるいは基壇上部以上の建物全体が改修された可能性も考慮しておく必要がある。

② 南経蔵周辺

a. 第1段階：地山上に厚さ約 1.1m の大規模な砂地業の整地を行う。北側ロングトレンチで確認された掘り込み地業は、南側では発掘調査範囲が狭いため、明らかではない。また、この上に SA015 および下層ペーヴを築くため、厚さ約 1.4m の版築を行う。SA015 部分は一段高いので、版築はさらに上へ 0.5m 厚くなる。下層ペーヴは本来砂岩敷きであり、後に砂岩ペーヴが撤去されている。

b. 第2段階：外回廊基礎と SC020 の工程の先後関係は今ひとつ検討が必要であるが、基礎部分の整備が通常先行するという観点からすれば、SC020 の次に回廊の上部を積み上げたとみるほうが自然であろう。ここでは、下層ペーヴの南側のみを改変し、この外側 (南側) に回廊を建設したと考える。

c. 第3段階：外回廊の中庭側は、厚い版築で水平に嵩上げされ、大規模な改変が行われる。版築は下層ラテライト・ペーヴ上面から最大 1m 前後の厚さで、その上に砂岩とラテライトのペーヴが敷設される。通廊 C は上層ペーヴと同時に計画された。上層砂岩ペーヴはもともと下層ペーヴにて使用したものを転用した可能性がある。外回廊は第2段階からどの程度改変されたか検討を要する。

d. 第4段階：SB009 と SX011 の木造建築がこの階段に相当する。上層ペーヴ構築 (前段階) 以降につくられ、南経蔵建設 (次段階) 以前のものである。今回の調査により、南経蔵以前に木造建築が存在したことが明らかとなった。

e. 第5段階：南経蔵が上層ペーヴに建造された。

以上のうち、通廊 C の創建時期と南経蔵創建時期に前後があることは指摘されているところであるが、通廊 C の解体時期とそれに伴

う機能の変化、南経蔵周辺施設としての役割の有無については、今後の検討を要する。

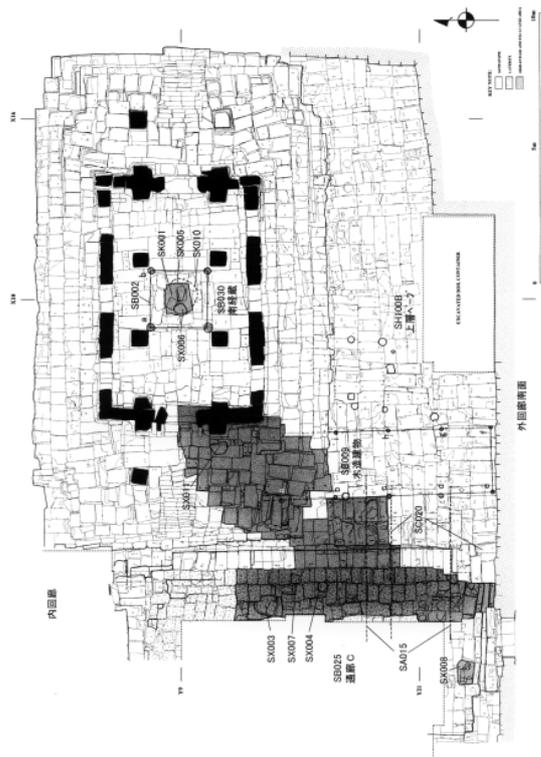


Fig. 3 第7次調査遺構配置図、発掘範囲

③ 外回廊南東面

- 外回廊基壇のトレンチは自然の粘土層を掘り込み、不透水の擁壁状の窪地の下部を形成している。赤色の粘性土は砂層の基壇の周囲に土手を形成するものである。基礎は細かい砂質土よりなり、数種類の火山岩や堆積岩の礫が混入し版築されている。
- 表面に切り出し、研磨の痕跡が残る砂岩材が多数発見され、これらの石材の存在から寺院建造用の石材を加工、研磨するための場所が付近にあることが推測された。
- 排水溝は外回廊基壇の砂層基礎を掘り下げて、ラテライト周壁の下に構築されている。このことから排水溝は基壇の砂層基礎が建造された時代よりも後に作られたものだということができるが、ラテライト周壁よりは早い時代に作られている。

④ 中央塔

- 室内床面は原形を保ち、砂岩台座を囲み、神像に対して木造の天蓋を架けていたことを示す4箇所の柱穴、西側入口には内開きの扉の扉軸になる2本一対の柱穴が確認された。床面柱穴の大半の埋土は暗色の汚れた新期堆積であるが、砂岩台座を囲むSX002a、2c柱穴の下部埋土は暗茶色味をおびたもので他の柱穴埋土とは異なる。SX002a下部では鉛塊、SX002c下部では水晶7点が出土した。SX002a南側には一段小形で浅い柱穴SX002eが重複し、時期

的に前後がある。SX002a、2eの上部は暗色の新期堆積土であり、新旧関係は直接切合がないため判明しないが、SX002eの方が新しいと考えられる。他の柱穴についても正円をなさず凹凸があり、2個の新旧の柱穴が重複している可能性がある。木造覆屋の施設と推定されるが、柱穴の重複は覆屋改修を示唆するものとみられる。SX002の遺物は、後世に転用材となる台座が設置された改修時の新たな地鎮行為を示すものと推察される。

- 中央墳SK001から出土した遺物の大半はクメール産土器・陶器である。瓦片8点、土器燭台1点、大型の黒釉壺4点、大型茶褐釉壺1点、灰釉小壺1点、他に砂岩製の神像の首の部分1点が出土した。

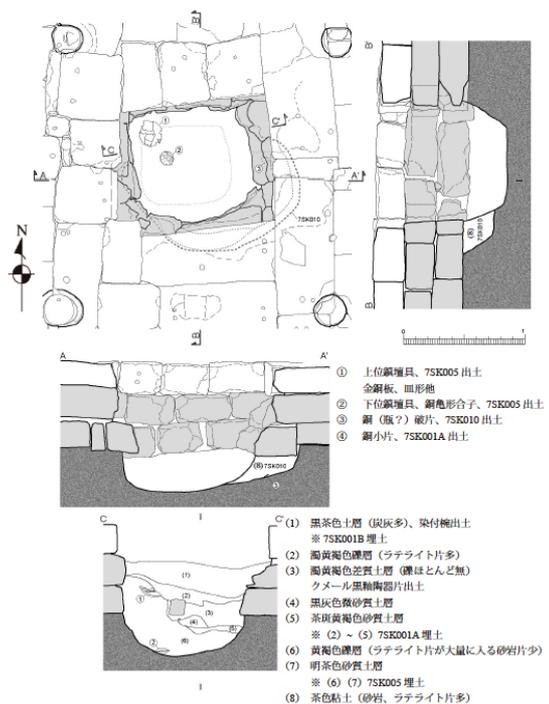


Fig. 4 中央孔平面図と西・北立断面図

(3) 周辺諸国との比較研究

本研究の発掘遺物のうち、仏教寺院時代の鎮壇具の残部と、その他金属製品に対し金属分析を行った。

- 少なくとも仏教寺院時代とヒンドゥー教寺院時代の両方に中国からの材料が流入したと示唆されるが、新規鎮壇具資料にはタイのN領域材料だけが利用されていたことが明らかとなった。
- 材料の化学組成の結果からカンボジアでは紀元前後の遺跡、8C前の前アンコール、8C以降のアンコール時代と歴史が変遷する過程で、利用された金属種が増えたことも明らかとなった。材料産地の観点からは時代と共に華南の材料からタイの材料を使用する割合が大きくなる傾向を示している。

c. バイヨンから出土した 12C 末～14C 前半の資料はその 65%が N 領域材料であった。N 領域の鉛がタイの材料であることから、材料種は純銅、銅-スズ、銅-鉛、鉛製品と多種あった。それらの殆どに N 領域材料が利用されていたということはタイとの経済的な繋がりは非常に強かった可能性を示唆する。

(4) カンボジア考古学者との研究協力および実務支援

(1)～(3)の全ての調査を実施するに当たり、OJT の方法でカンボジア考古学者への技術移転、実務支援、研究協力の体制をとった。特に基礎となる貿易陶磁器の整理においては今後の作業の継続を見越し、作業のマニュアル化を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

01: 山本信夫 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」、『貿易陶磁研究』No. 30、日本貿易陶磁研究会、pp. 56-81、2010 (査読有)

02: 下田一太、山本信夫、中松万由美、中川武 他 「アンコール・トム、バイヨン中央塔の地下構造の再検討」、『東南アジア考古学』30 号、2010 (査読有)

03: 山本信夫、コウ・ベツト、ルン・ワッタ、ヘン・カムサン 「3.3 南経蔵における発掘調査」、4.1 バイヨン中央塔の発掘調査」、中川武 (編) 『アンコール遺跡調査報告書 2009』、“Annual Technical Report on the Survey of Angkor Monument 2009”、JASA、pp. 31-40、pp. 89-94、2009 (査読無)

04: 平尾良光、飯沼賢司 「大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義」、別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会 (編) 『キリシタン大名の考古学』、別府大学文化財研究所企画シリーズ②ヒトとモノと環境が語る、2009 (査読無)

05: 山本信夫、下田一太、岩崎好規、福田光治 「4.5 中央塔室内発掘調査」、山本信夫、コウ・ベツト、ルン・ワッタ、ヘン・カムサン、中松万由美 「6 バイヨン寺院発掘調査進歩・成果概要」、中川武 (編) 『アンコール遺跡調査報告書 2008』、“Annual Technical Report on the Survey of Angkor Monument 2008”、JASA、pp. 67-86、pp. 198-200、2008 (査読無)

06: 山本信夫、コウ・ベツト、ルン・ワッタ、ヘン・カムサン、中松万由美 「4 南経蔵の修復工事に伴う考古学調査の報告」、中川武 (編) 『アンコール遺跡調査報告書 2007』、“Annual Technical Report on the Survey of Angkor Monument 2007”、JASA、pp. 74-97、挿図 1、2007 (査読無)

[学会発表] (計 6 件)

01: 中松万由美、中川武 「バイヨン寺院、南経蔵出土の鎮壇具について : カンボジア、バイヨン寺院に関する研究 (III)」、2010 年度日本建築学会大会 (富山大学)、2010. 9. 10

02: 山本信夫 「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」、第 30 回日本貿易陶磁研究集会 (青山学院大学)、2009. 9. 26 (講演)

03: 中松万由美、中川武 「バイヨン寺院、南経蔵周辺遺構における建造年代試論 : カンボジア、バイヨン寺院に関する研究 (II)」、2009 年度日本建築学会大会 (東北学院大学)、2009. 8. 26

04: 山本信夫 「バイヨン寺院の考古学」、ユネスコ世界遺産 BAYON 公開連続講演 (早稲田大学)、2009. 4. 17 (講演)

05: 中松万由美、中川武、下田一太 「カンボジア、バイヨン寺院の建造過程をめぐる新見解-カンボジア、バイヨン寺院に関する研究 (I) -」、2008 年度日本建築学会大会 (広島大学)、2008. 9. 20

06: 山本信夫、内田悦生、中川武、中松万由美 「カンボジア、バイヨン寺院南経蔵中央坑における出土金属製品の出土状況と組成分析について」、日本文化財科学会第 25 回大会 (鹿児島国際大学)、2008. 6. 14～15

[図書] (計 2 件)

01: 山本信夫、他 『アンコール遺跡における出土貿易陶磁器の様相解明』、平成 19 年度～平成 22 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (A) 海外) 研究成果報告書、219 (pp. 1-45、89-136、159-169)、2011

02: 山本信夫、中松万由美 「アンコール王朝の盛衰と陶磁器」、『神々の寺院バイヨン』、日本国政府アンコール遺跡救済チーム、バイヨン・インフォメーション・センター、pp. 22-27、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 信夫 (YAMAMOTO NOBUO)
早稲田大学・理工学術院・准教授
研究者番号 : 30449342

(2) 研究分担者 (全員 H20→H21: 研究連携者)

中川 武 (NAKAGAWA TAKESHI)
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号 : 30063770

小川 英文 (OGAWA HIDEFUMI)
東京外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号 : 20214025

小野 邦彦 (ONO KUNIHICO)
サイバー大学・世界遺産学部・准教授
研究者番号 : 50350426

下田 一太 (SHIMODA ICHITA)
早稲田大学・理工学術院・講師
研究者番号 : 40386719